



JESUS JONES

ELECTRIC WARRIOR

《総力特集》「パーヴァース」の美学

ロック進化論至上主義

オーディエンスとの心の狭間に橋を作る、
テクノロジーを使う目的はここにあるのさ

「ダウト」から一転、エレクトロニックの嵐と化したジーザス・ジョーンズ
「パーヴァース」を貫くマイク・エドワーズの未来志向はいったいどこから来るのか？
ロング・インタビュー/全曲解説/’93年展望とマイク3部構成で紐解く徹底特集!!

インタビュー●大谷英之

これでもか、これでもか、これでもか、と捲くし立てるエレクトロニックの渦。テクノロジーの限界に挑むかのようなハードコア・ポップ・ミュージック。それがジーザス・ジョーンズ、2年振りのサード・アルバム「パーヴァース」である。前作「ダウト」があらゆるスタイルを取り込みながら決して収束させることなくジーザス・ジョーンズの像を打ち出したのに対して、今回は曲のヴァリエーションはそのままに、テクノロジーを徹底的に駆使するという意味では、まさに一点突破、ゴリゴリの直情型アルバムである。常日頃からロックのリバイバルを嘆き、90年代という時代からロックは乗り遅れ過ぎているというマイク・エドワーズにしてみれば、当然の結論だろう。だが、テクノロジーの使用が通常ロックの持っている肉感的なグルーヴの欠如に繋がっていくという両刃の剣であることも確か。このアルバムはそうした点で、ロック・バンドとテクノロジーがどう関わっていくべきかに一石を投じた作品でもある。

その一方でマイク・エドワーズの世界観/状況認識は、オプティミズムとは程遠いものになっているのが今回の大きな特徴だろう。特に終盤などは、ただただ重く暗い。ひたすら落ちていく中で、出した結論は「信じられるのは自分だけだ」。色に例えるならカラフルだった「ダウト」に比べ、ここにいるのは派黒のジーザス・ジョーンズである。今までバランス感覚に溢れ、それによって成長を遂げてきたというバンド像を覆し、テクノロジーにのめり込み内面に深く潜行した刺き出しのマイク・エドワーズを初めて晒け出した、それがこの「パーヴァース」なのだ。

●最初に前作「ダウト」で収めた大成功についてから聞きたいんですけど、次のうちのどんな時にそれを実感しましたか。1)「ダウト」が全英初登場1位 2)「ライト・ヒア、ライト・ナウ」が全米で2位 3)「ダウト」が全米でプラチナ・ディスクを獲得。

「そういう気持ちで分散してたと思うんだ。とにかく僕たちはえらくツキまくってた。最初にイギリスで盛り上がった時は、やっぱり嬉しくてさ、この時は特に嬉しいって気持ちが強かったな。僕自身もすごく得意になっちゃったし……え〜と、それから少し経ってその舞上がった気分が落ち着いてUKツアーを始めたんだ。で、その後北ヨーロッパの方にツアーに出て、厳しい現実と直面し、上向いた気分がちょっと沈んで……。アメリカじゃあ好調な滑り出で、行った途端にシングルが上昇し始め、ゴールド・ディスクを獲得したなって思ったら、今度はプラチナになった。カナダでも同じ現象が起ってね、ネッズ（・アトミック・ダストビン）とか日本に行ったバンドは『彼らを蹴落とすのは難しいぞ』ってボヤいてたらしいよ。それからオーストラリア、ニュージーランドでも同じようなことが起って……つまり立て続けにこういうふうになっていったんだ。だから1991年の大半に僕は満足してるよ」

●「有名になりたい」「成功したい」と広言してきたあなたが、ようやくそれを手に入れてみて一番よかったなと思ったことは何でしたか。

「確かに有名になりたいって長いこと思い続けな

がら僕は人生を歩んできたわけで、それが実現して大きな満足感を味わったってことは言えるし、幸福な気分にもなったよ。それに……これを言うのは少しカッコ悪いんだけど、アメリカなんかだとクラブに行き易くなったしね(笑)。

でも、今のところはある程度の有名人にはなったかもしれないけど、本当の意味では……オールラウンドな有名人というわけじゃないと思うんだ。チャールズ皇太子が持つてる“有名”とは種類が違うし、U2の連中のそれともね……まだ極めて狭い範囲内のことであって、ヨーロッパみたいな所じゃ僕たちは存在してる場所さえないのさ。これはジーザス・ジョーンズしてみれば悩みの種で、それほどもう期待もしてないんだけど……ま、



僕たちだって
ボン・ジョヴィ!?
とは思ったさ。
それでも
リミックスを
受けたのは……

正直に言うとかかなり感傷的な気持ちにもなったんだ……。ヨーロッパでは僕たちは全く何にもしてないのと同じなんだから。あそこには僕たちの足を地に着かせてくれる何かがあるって考えてたのに、イギリスからたった21マイル離れたフランスでだってそうなんだ」

●MTVビデオ・ミュージック・アウォーズの新人賞も受賞しましたよね。ああいうショウビズのど真ん中に立ってみた時ってのはどうなんです？

「あの手のイベントに行く時は、僕たちは決まっていたはず好きのスクール・ボーイみたいな気分になるんだ。ふらりと出かけるって感じで。シリアスな受け止め方はしてない。R.E.M.のメンバーがタキシードなんか着てまってるのを見ると、

変な気持ちになるよ。『なんだ、これは！ 絶対におかしい』ってね。僕たちの方はそんなふうには構えずに行くから、楽しませてもらったり、時には焦ったりってことになる(笑)。それに尊敬してるような人間にも会えるわけで……僕はマイケル・スタイベにも2回も会ったんだ。他のいろんなキャラクターの人間をつかまえて話しかけてみるってのも面白いよ。こういうのはこの類のイベントのいい点なんだけど、一つだけ注意しなきゃならないのは、いい気になって酔っ払ってしまわないことだね(笑)……そうしたことを楽しみ、可能な限りもらうものはもらったって感じだね。その利点というの全部利用させてもらったと思うし」

●逆に成功したことによるデメリットっていうのはなかったんですか。

「そうだなあ、時々賛成できないことが書いてある記事か何かを読んだ連中、悪口を言うにはちょうどいい相手だって思われちゃうことかな。こういう連中って2カ月ツアーしてせいぜい2~3人るところだけど。それもみんな有名祝いで割り切ってはいるんだ。でも、自分のプライベートがなくなるってことについて文句を言うつもりはないよ。有名になればそれは避け難いことだし、そんなこと嘆いたってしかたがないからね。その部分は全く気にしてないんだ」

●あなたを音楽に向かわせているのはクリエイティブな部分と成功への意欲が50/50だと言ってましたが、それも今となっては大きく変わったんじゃないですか。

「う〜ん、それ50/50じゃなくて、60/40にしたいな。いや違う、今は70/30で音楽のクリエイティブな部分の方に重点を置きたいね。成功したおかげで、音楽に対してもっと自由になれる気がする。音楽への強い思い入れを感じるようになったとも思うし。誰かがリミックスして、ファースト・シングルをどれにするかってことで話し合う時、大きな確信を持って時間をかけ大声で議論できるようになったし、コントロールする分野で不足してるものはない。これが成功と引き換えに手に入れたと思ってたことさ。僕の考える本当の意味での成功っていうのはこういうことなんだ」

●ちょっと待ってください。ということは前作までは、あなたがコントロールできなかった部分もあったと？

「いや、何て言えばいいのかな……例えば『リキダイザー』はプロデューサーによって、かなりコントロールされたアルバムだったって考えてるんだ。あの時はとにかくプロデューサーと一緒に仕事するってことが初めてのことで、僕たちの方には何の経験もなかった。だから僕がやりたいと思ってたことと少し違ったところがあったって、後でよくなるだろうなんて考えたりしてね。でもそういう煮えきらないところは、後になってからもやっぱりどこかはつきりなかった。これは僕が全くの無知だったからなんだ。『ダウト』のためのリミックスやシングルのリミックスにしても、こういうリミックスを使うべきかどうか、僕にはわかってないところもあった。けど今の僕なら、100%はつきりわからないことがあったらそれは使わないって方針にしてるんだ。ここの部分が成功してから違ってきたところだよ。100%自分自身に確信

が待てるようになったのさ」

●なるほど。それでニュー・アルバムの話にいく前にどうしてもこれだけは聞いておかななくてはならないことから質問します。ボン・ジョヴィのリミックスについてですが、まずその経緯から話してもらえますか。

「ああ、あれは結局リリースされなくなつたらしいよ。彼らはかなり困惑したみたいだね。本人たちが変化を求めていたから僕のところに依頼が来たんだと思うんだけど、ジョン・ボン・ジョヴィは髪の毛を切ったし何かインパクトのあることをやろうとしてたんだろな。“キープ・ザ・フェイス”を初めて聴いた時、EMFによく似てるなって印象を持ったんだ。最初の出だしのところなんてEMFの“アイ・ビリーヴ”にそっくりなサウンドだった。彼らは明らかに僕たちやEMFみたいなバンドの音を聴いて意識していたはずだし、それにうっすらとマンチェスター・シーンのことでも思い浮かべてたんじゃないかな。曲を書いている時にそういったことを絶対に考えていたんだ。それからリミックスする時にセールスの市場の方もうまく操って、適任者を選んでやらせようって感じだったんだろな」

●あなた自身、ボン・ジョヴィというバンドについてはどう思っていたんです？

「彼らのマネージャーと話ただけで、バンドのメンバーには誰も会ったことがないんだ。テープを送ってもらって、僕たちでリミックスしたのさ。何の接触もなかった。まあ、彼らはいいポップ・ソングを作ったグループではあるけど、とにかく僕のタイプの音楽じゃないから」

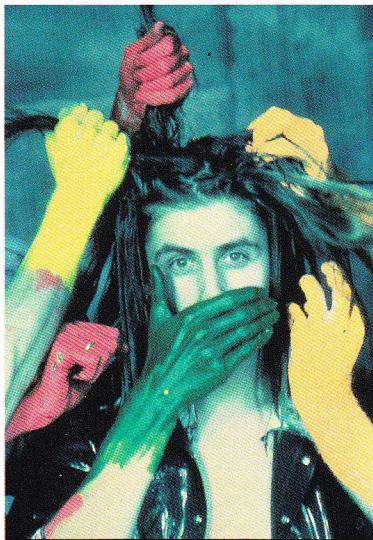
●なのはどうして仕事を引き受けたんですか。それだけが理解できないんですよ。例えば音楽の革新性からするとジーザス・ジョーンズとボン・ジョヴィなんてターミネーターと恐竜ぐらい離れてるわけでしょう？ それでもやったっていうのは、全ては金のため、もしくは、ボン・ジョヴィという古代の恐竜を自分の手でいかに進化させられるかに興味があった、この2点以外考えられないんですけど、どうなんですか。この場ではつきりさせてください。

「まあまあ、そう向きにならないで(笑)。君の指摘したように僕たちだって『あのボン・ジョヴィが!? 何か変だな』とは思ってたんだ。しかし、それを引き受けたからといって僕たちが失うものは何もないわけで……ボン・ジョヴィのやってることに何でも我慢できて、仲間意識さえ感じてリミックスした、なんて嘘をついて体裁を繕う気は全くないよ。テープを受け取って、その音楽と一緒にプレイした時は、距離感とよそよそさを感じてしまったのは事実なんだからね。でも不思議なことに、ボン・ジョヴィの音をリミックスするというのがシュールレアリスムみたいに思えて魅力さえ感じてしまったんだ。『僕たちの手ですっかり変えてしまったものをみんなに聴いてもらえるなんて面白いだろうなあ』ってね。金が欲しいってことじゃなくて、そういう気持ちがあったり引き受けた話なんだよ。イギリスのプレスは金儲けにやたらって言うてるらしいけど、そうじゃない。みんなが僕たちのことをどう思うかなんてことは気にしてなかったんだ。ジーザス・ジョーンズの方のアルバムも出るから僕たちのステートメント

はそこから伝えられるわけだしね。このリミックスはあくまでもボン・ジョヴィのためのステートメントを僕たちが作ってみようってものだった。だから、君の質問の答で言うなら後者の方だね」

●そうですか、これで次に行けます(笑)。では、ニュー・アルバム「パーヴァース」についてなんですけど、これだけ時間がかかったのはどうしてなんでしょう？

「とはいっても曲を書いてレコーディングしたのは1年以内だったんだよ。その前の1年はツアーをしていたわけだし……ツアー中に曲を書き始めて案を練ってはいったけど、'91年の11月にイギリスに戻ってきてから本格的に作り出して、それから僕は自分の時間を全て100%曲作りにかけるように



JESUS JONES

ELECTRIC WARRIOR

なったんだ」

●今回のアルバム制作に際しては強力なヴィジョンを持って臨んだそうですね。それは何だったんですか。

「そうそう、その強力なヴィジョンをこのアルバムの中で僕は見せつけたかったんだ。これこそが僕なんだからね。音楽的なヴィジョンで言うと、前もって多くのアイデアがあったからもう既に存在していたんだ。非常にテクノロジー的なアルバムになるだろうってこともわかってた。『ダウト』の時はテクノ・ミュージックってものがまだ見え始めてなくて、それが僕が取り入れてみたかった新しい影響力ってわけさ。そうしたものがきっちりとしたヴィジョンとしてあったんだ。

今回のタイトル“PERVERSE”には、頑なとかつむじ曲がり、強情っていう意味があって、僕たちは逆行していくロック・ミュージックの終わりなきリバイバルムへ向かってみようと思ったんだ。だからこういうタイトルを付けて、音楽が変わったって気付かせる、何か違うことをやりたかったのさ。でも、ダンス・ミュージックっていうのは今も尚最もエキサイティングなポップ・ミュージックの形態なわけだから、僕たちのそういった原点の一つを盛り込みながら、それをロック・ミュージックに加えていけばアイデアとして有効なんだ。“インターナショナル・ブライト・ヤング・シング”なんかで使ったシャッフル・ビートを使うことはもうないだろうし、ギターはワウワウも完全に使用禁止にした。だから2年前に比べてスタイルの上でも大きな変化があるよ。結果として、今の流行りのものとは反発し合うけれど、70年代のレトロなギター・バンドにもならないわけさ。この辺りが『パーヴァース』の定義の一つってことになるだろうね」

●そうしたヴィジョンがありながら、ザ・ザジュリアン・コープを手掛けてきたウォーン・リヴジーをプロデューサーに起用したのはどうしてなんでしょう？

「僕自身、ザ・ザの『インフェクテッド』がすごく気に入っててね、特にテクノロジーのアプローチのしかたが好きなんだ。新しいシンセサイザーのブランドができると真っ先に使ってガチャガチャいじりまくって音を出す、こういう勇氣ある精神をこのアルバムにも取り入れてレコーディングしたかった。そうするには非常にテクノロジー的なアルバムにするしかないだろう。ウォーンはハウス・オブ・ラヴなんかとも一緒にやってて、こっちの方はテクノロジー的なものとは全く違うんだけど、歌が素晴らしいかつりギター・サウンドがよくていい気分になる。ハウス・オブ・ラヴも好きだし、特に言うならやっぱりザ・ザなんだけど、そういうところから彼を起用することにしたのさ。“ゲット・ア・グッド・シング”の冒頭なんかは、ザ・ザっていうよりハウス・オブ・ラヴに近いところがあるけど、あの部分は僕の方から全く同じようにするにはどうしたらいいのかを聞いたんだ。でもだからと言って今度のアルバムはザ・ザやハウス・オブ・ラヴとは全然違うものに仕上がってる。たとえ全く同じテクニックを使ったとしても全く違う作品なんだ。プロデュースに関してはスタイルとテクニックという点になるけれど、大きな位置を占める内容の方は各々のバンドによって違って来るからね。そこは曲を作っていくライターたちの手腕にかかってくる」

●以前、ミック・ジョーンズとの対談で「ロックは時代についてきていない。僕はそれを変えたいんだ」と言ってましたが、それを実践したのが今回のアルバムと言えます？

「うーん、全くそのとおりだね。このアルバムで唯一、ライブでパフォーマンスしてるのは僕のヴォーカルだけで、その他の全てはMIDIギター、キーボード、ドラム・マシーンといったものを使ってコンピューターにダイレクトに繋いでプレイしてたんだ。他のバンドのメンバーたちは僕の小さなスタジオに来てプレイし、それを僕のコンピューターに接続しておく。ウォーンがデモを聴く時



バンドの中に入ってみたくと思ったなら、そうすることになるだろうしなあ。僕の興味の湧くことは何だってできるわけで……けど僕は、他の人たちが僕の後ろからフォローしてくるようなものにもいつも興味と信念を持ってるんだよ。必要なのはやる意志と想像力っていうわけさ。だから、今回の『パーヴァース』が以前の作品とは違ったことをする想像力が僕たちにあるんだってことを示してくれれば本望だね。そうなれば、もっと将来は幅広く違ったことをこなす機会が僕たちに与えら

JESUS JONES

ELECTRIC WARRIOR

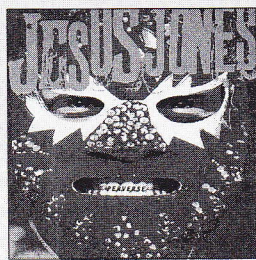
れるようになるんじゃないかな。僕たちはまだ本当の意味で何かを成し遂げるための入り口近くにいるんだと思う。アメリカでトップ5のヒットが2曲が出ただけじゃ、まだ何の保障にもならないし、もっともっとビッグにならなくちゃいけないんだ。U2やINXSの段階に達するには大きなリスクも背負っていかなくちゃならないのさ

ルースにも好きなものはたくさんあるんだよ。ジョン・リー・フッカーなんてファンタスティックで素晴らしいし……こういうのは影響を受けた

要素として取り入れることはあるかもしれないけど、そのスタイルに拘ってはまりたくはないんだ。うーん……しかし、結局はもし僕が来年ジャズ・

●あなた自身、そうした未来志向はいったいどこから来るんですか？ ミュージシャンの中には自分のルーツに戻りそれを探究していくっていう人

マイク・エドワーズによる全曲解説



「パーヴァース」
(EMI TOCP-7170)

① ZEROES AND ONES

テクノロジーの終わりなき変革の喜びと悲しみを歌ったもの。コンピューターで使う2進法のことを歌っていて0と1が僕たちの生活の多くの要素を変えているってことをテーマにしたんだ。テクノロジーは人生に善と悪をもたらすってね。今や0と1はまわりの全てを動かす重要な言語だ？ ロック・ミュージックの中では誰も

興味を示そうとしなかった題材でもある。この曲をオープニングにしたのは、アルバム自体を多く物語っているからなんだ。

② THE DEVIL YOU KNOW

TVコマーシャル、TV番組、映画そして特にポップ・ミュージックの分野では、常にノスタルジーとして持ち上げられ、ファッションブルとさえ言われるレトロなイメージの権威性を歌っている。「君の知っている悪魔は一人だけ」という下りはイギリス人がよく言う「知らない悪魔より知っている悪魔の方がいい」って文句をもじった。今の世の中にはそんな選択は残されてない。「君の知らない悪魔なんて存在しない」ってことだ。

③ GET A GOOD THING

ストレートで楽しいポップ・ソング。本当の意味での歌詞の深さ

はどこにもないけど、そこには簡単な深みみたいなものがあると思う。何かか本当に欲しければ、その他全てを脇に置かなくちゃならないことがある。最後までそれを追い求めると人生が充実してくる。ロックとポップのセンチメンタルそのものだね。

④ FROM LOVE TO WAR

僕たちが愛する人間たちと憎んでいる人間たちのあらゆる関係について切り離せない原理があるってことを歌ったもの。それが本当の感情より重要視されることが多い一方で、同じような状況で人間という行為に反した原理に基づく演じるという考え方があった。僕はこの点に興味があるな。

⑤ YELLOW BROWN

1年間ずっとツアーしてきて、

それが幕を閉じる時に僕は考えてみた。「一体何を学んだんだろう？ 何を見てどんな影響を受けたんだろう？」って自問自答してみたんだ。それで、どんな所へ行こうと世界には最も美しい所と最も醜い所があって、空気が水が汚染されていたりするってことを思い出した。リオ・デ・ジャネイロなんてもう水が黄色か茶色になってるんだ。世界中どこへ行こうかこんな感じで、そこから逃げ出すことなんて到底無理だ。いろんな所を旅してみても、これが結論だなんて何て悲しいんだろうってね。

⑥ CARICATURE (日本盤特別収録曲)

これは「ダウト」からのシングルB面に入っていたものを再レコーディングしたんだ。いろんな地位や立場にいる人のことを歌ったもので、互いにその人たちがどういう見方をしているかが描かれている。有名人だけじゃなくふつうの人たちも含め、パーソナリテ

も多いのに、あなたはもちろんこうしたルーツも
踏まえてはいるんですけど、決して振り返ろうと
はしませんよね。視線の先は常に未来を向いてい
る。それはなぜなのでしょう？

「いつも一番でいたいからだろうね。こういう負
けん気の強いところは自分でも好きになれない部
分もあるから、あんまり認めたくはないんだけど
……でも、他の違うことをやるってことはいい気
分にさせてくれるよ。今、負けん気って言ったけ
ど、他の連中よりよくなりたいってことじゃなく

まだまだ大きく
ならなきゃいけないんだ。
U2の段階に達するには
リスクも背負わないと

て、他とは違ってたいってことなんだ。個性っ
ていう考えだね。きっと、同時代性っていうこ
とに僕は取り憑かれているんだろうな。だから、
他の人たちが僕たちの後ろを追ってくるようなこ
とをすれば成功できるだろうって、バンドを結成
した時に思ったのさ。他人の真似をすることによ
って成功をするんじゃないって、ね。最近のロック・
シーンと来たら10年間リバイバルになるのを待つ
って感じじゃないか。そのサイクルが早くなって
きたから、5年後にまたニルヴァーナが流行るん



じゃないかな。もし彼らみたいな音が好きなら、
ほんの5年待って最初にリバイバルしちゃえばい
いのさ。流行り廃りの音を拾うなんてことは簡単

だろ？ ただタイミングを待つってだけでさ。だ
から僕としては、まずみんなより前に出て行って、
それから頭を使い、模範を示していきたいんだ」

イが誇張され続けるとある連中の
目には逆に縮小して映ることもあ
るってこと。人間ていうのは、他
人の本当に深いところまでは探れ
ないんだ。

7 MAGAZINE

この雑誌っていうのはポップ・
ミュージックの文学界のことさ。
音楽雑誌って、迅速で威勢がよく
て楽しさに満ちてはいるけど、素
晴らしい味わいはどこにもない。
そんな雑誌を読むことで全ての知
識を得ようとする人間になること
ほど危険なことはないと思う。

8 THE RIGHT DECISION

人生にシンプルなものなんて全
く存在しないって考え方だね。一
つのことを選ぶともう一つのもの
を失ってしまう。みんなはその複
雑さに妥協して逃げ道はないと思
っているけど、一番いいのは真正
面から立ち向かうってことなんだ。
人生は君たちに難しい選択を迫る

中で、どんな選択をしても絶対に
正しいとは言いきれない。

9 YOUR CRUSADE

人生を通じて人間ていうのは、
どんなに共通点がないと思っても
みんな集団の一部に属するのを奨
励されるってことを歌ってる。個
性的であることへの抑圧、それは
学校の校庭に始まりその後一生続
いていく。ロック・ミュージック
の中に入れてあるよ。どこのシー
ンの一部とかってね。そういう時
僕は没個性って言葉を思い浮かべ
る。ジーザス・ジョーンズは自分
たちらしいと思ってるのに。これ
は僕たちだけに限らずどんな人
にもあてはまる。没個性つまり安全
であろうとする人はいっぱいいる
けど、その考え方を真っ向から拒
絶してるんだ。

10 DON'T BELIEVE IT

僕たちのメディアの受け止め方
を考えてから作ったんだ。人間の

考え方を歪めることもできるだろ
う？ 特に湾岸戦争の時、中近東
出身の回教徒の人たちはまるで怪
物のように描写される風潮があっ
たと思う。その時のアメリカの報
道番組では、リビア人のことをこ
とごとく罵倒していたんだ。そん
な一方的な見方をすること自体、
すごくバカげたことだっていうの
に……。

11 PHOENIX

(日本盤特別収録曲)

僕が好きな都市のことではなく、
エジプト神話に由来するもの。自
分のまわりにあること全てを放棄
して、自分にアピールしてくる新
鮮な感覚でこの曲を書いてみた。
それもレコーディング最終日の2
時間前にね。

12 TONGUE TIED

このアルバムの歌詞を書してい
る過程で最も落ち込んだ時に作っ
た曲。あらゆる意味で、僕の言葉
への愛情をうまく表現できなくて

欲求不満になってしまった。イメ
ージがこんなにも混乱してしまう
ってことを僕は初めて経験し
たよ。

13 SPIRAL

秩序、日課、規律という非常に
不可思議なものがある。こういう
ものに度をを超えて取り憑かれると
狂気の沙汰になるっていうこと。
話をしているのさえ、一番不愉快
になってくる曲なので、解説の方
もこれで終わり。

14 IDIOT STARE

この曲は少しずつ部分的に作っ
ていったものなんだ。途中で休み
ながらゴチャゴチャと音を組み合
わせながらね。で、音の部分をも
のままにして、歌をつけ、一つの
曲にしていった。この曲はそうし
たインストゥルメンタルの部分
を除いても、結局は作るのに非常
に苦労した。なかなかうまくまと
ったんじゃないかな。

●そんなあなたから見て、今後ロック・バンドとテクノロジーはどう関わっていくべきだと思います？

「それらは純粋にロック・ミュージックの中にある他の連中が、心を開くかどうかによると思うね。外に目を向ければ何か起こっているのか見渡せるはずだから、大きな1歩を踏み出す必要はないんだ。みんながコンピューター・ゲームをやっているわけだし、地下鉄の切符を買う時だって自動販売機になっている。テクノロジーは至る所に存在しているんだよ。なのになぜ音楽に対してはみんな頑なに偏狭な態度を取るんだい？ ロック・ミュージシャンたちからしてそうなんだ。今、僕たちが生きてる時代を見直す必要があるはずさ。」

それに音楽のジャーナリストにだって、自分のまわりで何か起こっているのかに気付いて、意識してみなきゃならない。多くのライターは、未だに50年代の架空のロック神話とやらを探究しようとしている。そんなもの、現代をまるで反映してないっていうのに……。こういう考え方って、女王陛下様ってのと同じで、まだみんなが作られた神話を気に入っているってだけなんだ」

●今度のアルバム中の“マガジン”では、マスコミも痛烈に批判してましたよね。これはやっぱりイギリスの音楽紙を指してるんですか。

「特にどの雑誌ってことじゃあないんだけどね。問題があるのは何もイギリスの雑誌だけに限ったことじゃない。最近だとオーストラリアにもツアー・ポッピー・シンドローム（ツアーをやった人気が出てきたバンドをけなすこと）が起ってきて、イギリスのプレスにへつらい、その後を追うみたいな傾向があるんだ。日本やアメリカじゃそうならないようだけど……全てが何か流行りかかってことに感づかされて、気まぐれで変わり易くて、2ヵ月持てばいい方なんだよ。マンチェスター・ブームなんてまさにそうだっただろ？ こういうのを見ると気が滅入ってくるよね。僕はそんなブームより、やっぱりバンドの功績そのもので評価してあげたいと思ってる。ニルヴァーナみたいないいバンドに関しては本当に同情したくなるよ。だって、その“シーン”なんてのと結びついて、どうしようもないクズ・バンドまで彼らの仲間入りさせるんだからね。『ネヴァー・マインド』は実に素晴らしいアルバムだったし、彼らは際立っていたのに、他の始どがその後追いばかりで、何も新しいことは起こってない。そりゃあ、“シーン”の中にもいいバンドがいていい曲もあるけど、それら全てを無条件に受け入れる必要はないのさ。こんなふうだからイギリスの音楽はつまんなくなっていくんだ。イギリスの音楽ジャーナリズムと音楽は相互作用し合ってる。つまらない退屈なライターがいるから、バンドの方も面白くなっていく……ま、バンドがつまらないから書く方もってこともあるだろうし、どっちもどっちなんだよ」

●そこまで言っちゃって、しかも今回は歌にまでしてるとなると、下手すればイギリスの音楽紙全てを敵に回しちゃったりしません？

「そんな構わないよ。ジーザス・ジョーンズにとっては全く問題にならない。だって連中は『リキダイザー』をリリースした1ヵ月後に僕たちを敵視し始めたんだからね。『ダウト』にしてもセー

ルスの方は好調だったのに、向こうの態度は変わりなかった。特にアメリカで大成功してからは、僕たちは絶えずき下ろされてきたんだ。この国でジーザス・ジョーンズに関していいことが書いてある記事なんてずっとお目にかかってないよ。もうんざりだっていうのはもちろんあるけど、『うるせえなあ！』って無視すりゃいいのさ、あんなの。だけど、それにしだって僕たちの成功には全く影響しなかったんだ。ジーザス・ジョーンズってというのは5年後に再発見されるようなバンドなのかもね。デベッシュ・モードなんていい例さ。彼らは長いこと批判され続けてきたんだ。僕たちの『パーヴァース』も評論家連中から称賛されるには、かなり時間がかかるんじゃないかな。株券の配当と同じだよ(笑)」

●ところで、今回の「パーヴァース」は今まで話してきたテクノロジー徹底主義と同時に、異様なまでに暗く重たい作品だったことにも驚かされたんです。あなたは以前「ひどく落ち込んだ時に曲を書くことによって立ち直る」って言ってました

JESUS JONES

ELECTRIC WARRIOR

このアルバム制作時には 自信を喪失して アイデンティティの危機 にさえ遭遇した

が、このアルバムがそういう面では一番顕著だったんじゃないですか。

「うーん、そうは思わないけどな。どこにも逃げ場がなかったっていう点では、今回が恐らく初めてだったろうね。その結果、アルバムに深みが加わったのかもしれない。“イデオット・ステア”みたいな曲を書いたのはそういうところなんだ。メランコリーで落ち込んだままの僕がそこには存在している……やっぱり、時としては君の言ってるとおりかもしれないなあ……なぜかっていうと、このアルバムで僕の気持ちも動揺することがあるからね。歌詞を作るのに随分手間取ったし、自信を喪失した時はアイデンティティの危機にさえ遭遇した。これは僕にとってより個人的な作品で、中でも最もその色合いが濃いのがアルバムの終盤で“イデオット・ステア”“タン・タイト”“スパイラル”といった曲だろうな。他ではここまで自分のパーソナリティの奥深いとどこまで見せてないと思うんだけど……だからみんなは僕のことを底が見えて軽薄で自惚れの強い奴って考えてるのかもしれない。こういうふうに落ち込んでいくの

は、12月から3月にかけてよく起こるんだ。どうしてか理由はわからないのに、とても惨めな気持ちになってしまふ。日常的というよりは時期的なものなのかもしれない。今回の歌詞を作る時もちょうどその頃で、僕にとってはいろんな意味を持つことになった。何かを表現するってことがとても難しくって、グチャグチャの螺旋になったり、いびつな円になって終わりとかって感じで『ダメだ、鬱になって歌詞が書けやしない……』ってことか何度も何度も続いたんだ」

●ザ・ザのマット・ジョンソンは「マインド・ボム」を作る時に、自ら禁欲生活を課し、断食するほどまで自分を追い込んだそうですけど、そういった部分はありましたか。

「僕が信じてやったのは、夜遅くまで起きてることだった。ビールを1パイントか2パイント、またはワインを1~2杯を適度に胃袋に流したりして、禁欲生活から自分を解放してやると、物事が動き始めるってことがよくあったね。これもドラッグ服用の時の典型的な方法論だよ。まあ、僕はそういう事実も隠すつもりはない……特に、歌詞を作る時に効果があつてよかった。音の方はマシーンをいじっていくうちに出来上がっていくって感じだったけど、歌詞を書くとなると直感に頼るというよりは、もっと大脳に刺激を与えてやらないといけないからね。弾けるように言葉が生まれてくるわけではない、自分の考えを簡単に映し出してくれるわけじゃない。じっくり考えないと、判断の基準も怪しくなってくるんだ」

●今までバランス感覚に溢れていたあのマイク・エドワーズがグチャグチャになりながら作った歌詞、今回はそういう内省的なトーンがサウンドにも反映されているわけですね。

「もちろん、そうなるはずさ。“イデオット・ステア”の中には全体のトーンが、“イエロー・ズラウン”“フロム・ラヴ・トゥー・ウォー”“ゼロズ・アンド・ワンズ”といった曲には僕の全感情が反映されている。音楽ってというのは自分のエモーションに忠実に従ってくるものなんだ。それが僕の場合、映画や写真のようなヴィジュアル以上に音の方か刺激的で自分に反映されてくる。インスピレーションやアイデア、ムードをちょっとした音の中から容易に得ることができるといいたいのさ。ただ曲を書く時はかなり直感的なものに頼るから、この曲の時の僕の気分は、こうだったっていうことは説明しにくいけどね。“イデオット・ステア”なんてもう僕の心の中のものって感じでかなり内省的なサウンドだし、“タン・タイト”は攻撃的で“スパイラル”に通じるところがあるし……」

僕が曲を作る時っていうのは、いつも自己表現のことを頭の中に置いてるんだ。これはべつに自己本位ってわけじゃないと思う。いいものを書きたかったから自分のことをいいライターだって信じなくちゃならないし、自分のことを書けば他のみんなもそこに共通点を見つけれられるだろう？ “ライト・ヒア、ライト・ナウ”なんて曲は、きっと多くの人たちの味わう感動を表現してるものだしね。そういう点がレコードのセールスにも貢献するんだらうな。だから、自分のために曲を作るってことに関して、僕は罪の意識を全く感じてないんだ」



「エホヴァキル」
ジュリアン・コー
（フォノグラム PH



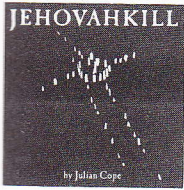
「エクスペリエ
ザ・プロデュー
（ニイブックス AV

’93年に入っ
う僕の’92年ト
年のアルバムの
ッ10)に入っ
に全く影響力を
と考えられるも
その例を挙げる
ープ「エホヴ
ッ「ボーン・マ
「ボス・ドラム」
アルバムの種
てこないだろ
’93年に僕に
期待するのは、
の「警告」と
の「PLAY MORE
っにもきつ
くれると思
隠さのレベル
ずらされてい
ック・ミュージ
運しえるかを
同じように
ンリーズ・ドリ
ほどのパワフル
その違いは彼の
響力を与えるよ
ックなイマジネ
一連りの政治学
る。彼がリスナ
ける絵とストー
ストーリー性を
を認識させてく
かし集はあるこ
編り返しのア

厳選! 1992年間ベスト・アルバム

'92年ベストを選出していく中で1993年のロック・シーンを展望する

文●マイク・エドワーズ



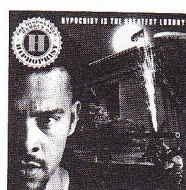
「エホヴァキル」
ジュリアン・コープ
(フォノグラム PHCR-720)



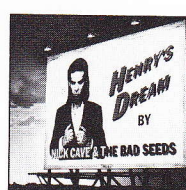
「ボーン・マシーン」
トム・ウェイツ
(フォノグラム PHCR-1710)



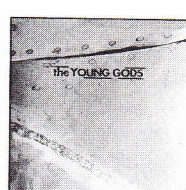
「ポスト・ドラム」
シェイメン
(コロムビア COCY-75127)



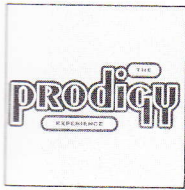
「警告!」
ヒップホップリシー
(フォノグラム PHCR-715)



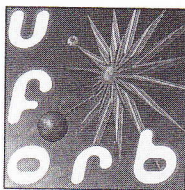
「ヘンリーズ・ドリーム」
ニック・ケイヴ&ザ・バッド・シード
(アルファ ALCB-476)



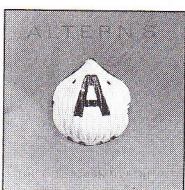
「TV・スカイ」
ザ・ヤング・ゴッズ
(アルファ ALCB-477)



「エクスペリエンス」
ザ・プロディジー
(エイベックス AVCD-11071)



「U.F.O.R.B」
ジ・オーブ
(ポリドール POCP-1236)



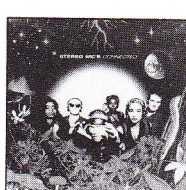
「FULL ON... MASK HYSTERIA」
ALTERN 8
(NETWORK TOP CD 1)



「イレヴンティーン」
DJジー・チェインソー
(コロムビア COCY-75095)



「ベイブ・レインボー」
ハウス・オブ・ラヴ
(フォノグラム PHCR-39)



「コネクトド」
ステレオMC'S
(フォノグラム PHCR-717)

'93年に入っても影響を及ぼすだろう僕の'92年トップ・アルバム。'92年のアルバムの中でおそらく僕のトップ10に入っても、僕や他の人たちに全く影響力を及ぼさないであろうと考えられるものはいくつかある。その例を挙げると、ジュリアン・コープ「エホヴァキル」、トム・ウェイツ「ボーン・マシーン」、シェイメン「ポスト・ドラム」。'93年にはこうしたアルバムの模倣者達は多くは生まれてこないだろう。

'93年に僕に影響を与えたいと期待するのは、ヒップホップリシーの「警告!」とコンソリデイトドの「PLAY MORE MUSIC」。彼らはラップにもきつと大きな影響を与えてくれると思う。知性や政治意識と明確さのレベル、そして伝統的に引きずらされている価値観への疑問はロック・ミュージックがいかにまだ変革しえるかを暗示している。

同じように、ニック・ケイヴの「ヘンリーズ・ドリーム」にも妬ましいほどのパワフルな精神が宿っている。その違いは彼の強調しているのが影響力を与えるようなアーティストイックなイメージングであって、一握りの政治学ではないということ。彼がリスナーの心の中に描きつける絵とストーリーは、僕がいかにストーリー性を作り出す力が弱いかを認識させてくれるものだった。しかし僕はあることに気がついた。度々繰り返しこのアルバムをかけても僕

のイメージングはそそり立たないだろうということ。それでも同じ割合で何か僕に影響を与えてくれることを期待したい。少なくともここには英語で歌詞を作る偉大なライターの影響が存在している。

音の方では'92年で最もカッコよかったのが、ヤング・ゴッズの「TVスカイ」。このバンドは僕たちがデビューして以来、多大な影響を及ぼしてきた。ヤング・ゴッズのサウンドがなぜこんなにも新鮮なのかというと、いろんなタイプの音源から作り出したサンプルをプレイしながら、シンガー、ドラマーとサンプル・プレイヤーがまとまり、曲の中で絶えずそのサウンドが変わっていくところだろう。曲自体もバンドが今までに作った中でベストなものばかりだ。ライブも凄。僕にとっての“アルバム・オブ・ジ・イヤー”。

毛色は違うが、ザ・プロディジーの「エクスペリエンス」もなかなかいい。しかし、“チャーリー”とか“ファイアー”といった僕が評価してないシングルのことを考えると、プロディジーに少し警戒心を抱いてしまうのだ。なのにイアンがこのアルバムをフォト・セッションに持って来た時、僕は一発で気に入ってしまった。ひとつの完成したテクノ・アルバムとして初めて聴けるものだった。全曲テンポが異様に速くハードで素晴らしいプログラミングがしてあって、まさにアートするテクノだ。常

に突然変異しながらテクノは'92年で最も不変的にエキサイティングな形態をした音楽であった。そういったテクノの中にはクラブ向きではないけれど、家の中で聴くために作られたものもある。'91年の僕のお気に入り、LFOの「FREQUENCIES」も、このカテゴリーに入るだろう。'92年によかったアルバムでは複数のアーティストが参加している「ARTIFICIAL INTELLIGENCE」だ。LFO、クラフトワーク、ブライアン・イーノ、YMOの軌跡を追うアルバムである。

ジ・オーブやアフエックス・ツイン(APHEX TWIN: '93年に多大な影響力を持つ曲を作り出すことになる)は匿名にもかかわらず、アルバムに存在の影を落としている。

またオルタネイト(ALTERN 8)の「FULL ON... MASK HYSTERIA」は、テクノのもうひとつの面、ポップしていて高慢きな部分を表わしている。彼らは可能な限り多くのダサ〜いレイヴを使って盗作王KLFに続く自分達のことを笑い飛ばしながら、決まりきった法則にしがみつき、数多くの素晴らしいポップ・ソングを作ること成功している。この作品も出たばかりの時は非常に楽しくて結構なのだが、全ての本物のポップ・ミュージックのように、発表されてから1年もするとひどいサウンドに成り果ててしまうことだろう。

DJジー・チェインソーが、イギリスのプレスからこれほど嫌われて

いなければならないのだが……。彼らは本当にいいライブ・バンドだ。「イレヴンティーン」は、僕の'92年のお気に入りアルバムの1枚に入る。素晴らしい曲、素晴らしいギター・リフと大地が揺れるようなベースがたっぷり含まれている。連中はチャンス半分を与えるだけで非常に影響力のあるギター・バンドになり得るからシアトル出身のバンドを装うことなく十分やっていけることだろう。

ハウス・オブ・ラヴは、イギリスのインディ・シーンの中で恐らく最も影響力のあるバンドに違いない。イギリスのMTVでやっている“WATCH 120 MINUTES”を見たら、きっとイミテーター6人には出陣すだろう。感謝すべきことは彼らはその模倣者よりもベターだということ。今年のアルバムがそれを証明している。どの曲も思い出しに残り、知性と調和と詩情に溢れている。

実は僕はこのベスト10アルバム評をクリスマス前に書いているのだが、全てのパーティが終わった後でも、パーフェクトなサウンドトラックとして残るアルバムが1枚ある。ステレオMC'Sの「コネクトド」がそれだ。彼らの影響力はラップの境界線をなくし、同時にハードコアなラップ・ファン達をハッピーにさせながら音をラップの中に導入していくことになると思う。しかもチャートを経由して大きな注目を集めることにもなるだろう。